

2020（令和2）年度

23日〔○〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十三ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず鉛筆を使用し、解答用紙に記入すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の記事を読んで、後の問に答えなさい。

神社の中空性を理解する例として、典型的なのが伊勢神宮の式年遷宮しきねんせんぐうです。神が二十年に一度引越しをするため、正殿などの古い社殿の正確なコピーをつくって建て直し、ご神体を新しいほうへ遷すうつすという儀式です。引越しごとにそのコピーがオリジナルになっていく——これは本質があったら不可能なことです。

ジン（起源）を守らなくてはいけないので動かすことはできません。ずっとそこにあるから意味があります。しかし、伊勢神宮の場合は、隣り合った場所を行ったり来たり引越す。こういう移動ができてしまうのも、中心が空虚でなければ難しいことでしょう。

建築家の磯崎新氏が自著『始源のもどき ジャパネスキゼーション』（鹿島出版会）において、伊勢神宮の本質の不在から天皇制をつなげるといふ、スリリングな議論を展開しています。すなわち「イセにおいては、実はなかったはずの起源が隠されている。からこそ」誘惑的であり、「建造物、祭祀さいし、歴史的成立の事実、そのすべてが、隠されている。こと」こそが問題とされるべきで、そもそも、「イセはひとつの時点で捏造ねつぞう」されたものであり、だからこそ起源などないし、「それがあつたかのごとくに騙かたることで、誘惑が持続する」。そして、その伊勢神宮の式年遷宮の反復システムは天皇制の構造に近い、とされています。

伊勢神宮は、オリジナルと同一のレプリカをつくり続けているようでありながら、そのつど不純物を取り除き、より純粋さを目指して再デザインされ続けてきた。この純粋さへの接近が、天皇制における継承にも見て取れる、と磯崎氏は言います。「大嘗祭だいじょうまつい」によって即位する天皇の肉体は天皇霊の依代よりしろであるとされ、儀礼によって代々受け継がれている。こと、天皇が即位するたびに遷都が繰り返されたこと、実際には継承において伝えられるべき本質的な教義は存在せず、むしろどんどん新しい要素を取り込んで古いものを廃棄していく柔軟性がある——というのです。

神道がいかに融通無碍ゆうつうむげであるか——。なにより神様を新たにつくり出すことができ、神様と神社がセットになって表現され

るといふ例は他に類がありません。豊臣秀吉を神に祀れば豊国神社、徳川家康を神に祀れば東照宮が建てられます。一神教では、このような中空ゆえの融通のきかせ方はまず通用しないでしょう。

その空虚さはまた、東京という街にも象徴されます。フランスの思想家ロラン・バルトは、日本を訪問した際に東京を「いかにもこの都市は中心をもっている。だが、その中心は空虚である」（『表徴の帝国』、宗左近訳）と評しました。ヨーロッパでは、都市の中心に行くに従って教会などの施設が集中し、「充実」しているが、東京は中心に皇居という「禁域」をおき、緑に蔽われ、濠によって防御されている。「神聖なる《無》」を隠している。バルトは、短期間の滞在だったにもかかわらず、これこそ日本の特異性の一つであるとカッパしたのです。

ほかにも「中空」という言葉ではありませんが、「ウツホ（空・空洞）」について研究した作家の中上健次の例を取り上げたいと思います。『宇津保物語』という日本初期の長篇物語がありますが、中上自身にも同名の小説集があります。

中上によれば、ウツホとは空虚なトポス（場所）ではありません。つまり、単に空っぽではなく、常に入れ替え可能ななにかが籠もっている場所です。彼は象徴的に「バイブレーションが籠もる」という言い方をしていますが、これは遠近法の消失点であるとか、ラカン派の主体であるとか、構造があると必然的に生じる「欠如」や「あな」とは位置づけがことなるものです。構造的欠如は一神教の反転形である否定神学的構造をもたらしませんが、中上のウツホは、いわば実体的な空虚なのです。

それは彼のテーマの一つである「路地」とも無関係ではありません。中上は「ゾーンとしてのボーダー」という表現をしていて、太いゾーンとして境界は引けるけれども、そのゾーンの中に線としての境界は存在せず、^(い)渾然一体としていいます。それを中上は松阪牛の霜降り肉にたとえ、フランスの哲学者ジャック・デリダと日本文化の特異性についての論戦を交えました（「穢れということ ジャック・デリダVS中上健次」）。境界線を明確に引かないことと、まったくの真空ではない空白をイメージすることは、いずれも日本神話における中空構造を補助線にすることで、理解しやすくなると思います。

さて「中空構造」は、私が最近よく評論で取り上げる「オタク」や「ヤンキー」文化にも通じています。日本においてオタク文化が浸透と拡散してきたように、濃いものは薄く広く拡散していくものです。最近「マイルドヤンキー」とも言われ、ヤンキー文化が広がりを見せています。

「ヤンキー」といっても、私が焦点をあてたいのはカルチュラル・スタディーズ的な日本の不良文化ではなく、ヤンキー的なイメージ、バッドセンス的な美学の構造です。かつては、ごく一部の地域に限定した不良集団だったものが、いまは「不良」という本質が失われて **Ⅱ** な模倣、あるいはエートス（持続的な面、慣習）として共有されつつあります。当初はごく一部の仲間内だけで共有されていた不良文化が、一つの美学として一般化されたことで、日本全体が「マイルド」なヤンキー化へと向かいつつあります。私はこの、個人や社会に拡散しつつあるマイルドヤンキー性もまた、日本の中空構造と浅からぬ関係にあると考えています。

「派手でヤンキー的な不良の趣味というのは、世界中にあるでしょ？」と言われることがあるのですが、それは誤解です。欧米の不良文化は限定的に下層のもので、日本だけが「平等」に、階級を超えてヤンキー的なエートスが広まっているからです。さらに言えば、ヤンキー文化にはバッドセンスだけではない一種の倫理性、規範意識までが含まれますが、この点も海外の不良文化には見られない特徴です。

ヤンキー文化における表層と本質について考えると、「表層を真似れば誰でもヤンキーになれる」ということが言えます。そこに蓄積はいりません。「ジャージを着てゴールドのネックレスをして女物のサンダルを履く」といった具合に、誰でも簡単に装うことができるし、装っているだけで内面もそれっぽくなります。ヤンキーのファッションは、先述のバルトが指摘した「表層だけを装う」を地でいくような、特異なファッション性と読み込むことができるでしょう。

また、ヤンキーの美学で最も重要なのは「気合」です。詳しくはセツチヨ（『世界が土曜の夜の夢なら、ヤンキーと精神分析』角川書店）をお読みいただければと思いますが、単純に気持ちを「アゲ」てくれるものが、ヤンキーには非常に好まれます。アゲというのは、「アがる」（気分が高揚する、テンションが上がる、イケイケ状態になる）から来ている言葉で、中身が

なくても、勢いがあればよい。これは、政治思想史家の丸山真男が、「歴史意識の『古層』」という論文で、『古事記』を読み込んだ際に指摘した、日本文化の古層には「つぎつぎになりゆくいきほひ（勢い）」の歴史的オプティミズムがある、という言葉にもツウテイします。 「気合」と「アゲ」といった「勢い」が日本文化のいちばん深い部分ですと受け継がれてきているのです。

その「気合」と「アゲ」が日本のある部分を支え、動かしてきたのは事実です。東日本大震災に代表される被災地の復興がよい例でしょう。「気合」という、ある意味空虚な言葉が、何万人もの人を動員できることをヤンキーカルチャーは実証しています。ふつうに人を動かそうと思ったら、宗教の教義や思想がどれだけ大事かということがずっと議論されてきましたが、このヤンキー文化だけは、そのような議論などは飛び越し、気合だけで思想はいらぬ、保守でも革新でもいいという、非常に融通無碍なところが特徴的です。

しかし不思議なのは、ヤンキー的なたまたまの成功者の著作を読んでみても、気合の入れ方についてはいろいろ書いてあるのですが、夢を叶えるための
Ⅲ な作業工程についてはほとんど言及されていません。気合と絆きずな、夢と覚悟があれば何でもできるという精神論は、まさに「中空」という感じがします。言い換えれば、中空という空虚だからこそ気合が入るとも言えます。

「行動の動機がなくても、行動してさえいればいい」という行動原理主義的な考え方が優位であるため、彼らは方法論を言葉にする必要がないのかもしれませんが。たしかに、主体を空虚にしたほうが人間は行動できるという主張は心理療法的にも当たっています。心理療法では、人間は考えがあって話すのではなく、話すことで自分の考えを発見するという発想があります。主体を脇に置いて、述語で考えるという感じに近いと思います。

と、このように突然に話題がヤンキー文化に振れたことで困惑された方もいらっしゃるかもしれません。しかし、これは河合隼雄が示した「中空構造」と紛れもなく通じている問題です。先に私は、この構造が私たちの日常のさまざまな場面に見え隠れすることを指摘しましたが、ということはずまり、日本人にとって昔から無意識のうちに共有されてきた構造でもあると

言うことができます。そこで、この中空構造にはどのようなメリット、デメリットがあるのかを考えてみます。

まずメリットは、バランスが取りやすいことが挙げられます。先に紹介した河合の言葉で「他の多くのものと適切にバランスを取りながら、中心の空性を浮かびあがらせるために存在している」ことはすでに述べましたが、別のところで次のように説明しています。

「中心が空であることは、善悪、正邪の判断を相対化する。統合を行うためには、統合に必要な原理や力を必要とし、絶対化された中心は、相容れぬものを周辺部に追いやってしまうのである。空を中心とするとき、統合するものを決定すべき、決定的な戦いを避けることができる。それは対立するものの共存を許すモデルである」

私の言葉に置き換えれば、正面からの闘争や摩擦は回避できる、となるでしょうか。それは責任の追及もうやむやで済むということにつながるので、傍から見ているぶんには情けなさを感じたりするかもしれません。しかし、長期的に見た場合には、生存の法則としてはプラスにはたらいっている部分も大きいと思います。これも広い意味では、バランスの問題といつてよいかもしれません。

逆に、日本で弁証法が成立しないとされた背景にはこうした特徴があるだろうと思います。つまり、「本質と本質の対立」がないので、対立も非常に些細で本質的ではない部分に終始してしまう。『古事記』で例に挙げた、二神のどちらか一方が中心になっても、^{注4}カウンターバランスが生じて入れ替わる「正と反の変化」にも通じます。

日本語自体も、特殊な構造を持っていることはよく言われます。特にカタカナ語が典型で、外来語をどんどん取り込んで新しい言葉にしてしまう融通無碍な面を持ちながら、別の観点から見れば、それ以上は日本語に食い込まないように境界を設定しているとも言えます（さすがに、言語に関してはまったくの空虚とは言えないので、これは柔軟だと言っておきますが）。

また、これは認知言語学者の池上嘉彦氏の指摘ですが、日本語は客観描写がとても苦手であると言います。それは主語と述語の構造が曖昧で、主語がなくても文章が成り立ってしまうためです。このため、実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのような文体になりやすい。そのせいかどうか、

私の印象で言うと、日本語で何かを記述すると虚構のレベルが一段階上がる感じがします。現実を描写しているというよりも、**X**。その意味で、やや強引に言えば、「日本語というのは空虚さはらんだ言語」とも言えると思います。

言語もカルチャーも柔軟で、海外の文化への好奇心も旺盛、そして新しいテクノロジーも積極的にどんどん取り込んでいくという日本文化の特徴は、経済発展の原動力にもなっていたと思います。他のアジア諸国とは異なり、和風アレンジし、モディファイ（修正、変更）して取り込んでしまう。それは「工夫の文化」であったとも言えるでしょう。ただ逆に言うと、工夫するための器はあるけれど、まったくのイノベーションは起こせないという限界もある気がします。ただ、好都合と言ってよいのか、現代はゼロからのイノベーションというものが起こりにくい時代になりましたので、どちらか一つを取るのではなく折衷することが得意という、日本の強みがこれからより生かされていくかもしれません。

一方のデメリットとしては、先ほども少し述べたように「弁証法が成り立ちにくい」。政治体制はその典型でしょう。

（斎藤環「日本人の心理 河合隼雄『中空構造日本の深層』による」

注 1 ラカン——フランスの哲学者、精神分析家（一九〇一〜一九八一年）。

2 否定神学——神は理性や言葉で把握できないとしてこれを否定的概念で考察・表現する神学。

3 カルチュラル・スタディーズ——種々の隣接学問の知見を応用しながら文化一般について考察しようとする学問潮流。

4 カウンターバランス——釣り合いを取るもの。また、釣り合いを取ろうとすること。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) カツパ

- 1 資源がコカツする
- 2 拍手カツサイを浴びる
- 3 群雄がカツキヨする
- 4 大空をカツクウする
- 5 カツカの命令に従う

(イ) セツチヨ

- 1 夏の高山のセツケイ
- 2 セツトウ犯が捕まる
- 3 表現がチセツである
- 4 セツシヨウを禁ずる
- 5 異文化をセツシユする

(ウ) ツウテイ

- 1 在庫がフツテイする
- 2 粗品をシンテイする
- 3 テイセン協定を結ぶ
- 4 敵をテイサツする
- 5 間違いをテイセイする

問二 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを、次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 融通無碍

- 1 行動などが控えめで素直なこと
- 2 汚れなく無邪気に行動し自由であること
- 3 何でもやり遂げる思考力や行動力をもっていること
- 4 考えや行動が何ものにもとらわれず自由であること
- 5 人間の及ばない無限の力をもっていること

(い) 渾然一体

- 1 まじりあい、とけあっているさま
- 2 二つのものが対立し競いあうさま
- 3 欠点がなく調和しているさま
- 4 固まったり支えあったりしているさま
- 5 ぶつかりあい変形しているさま

問三 空欄

I

く

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、ひとつの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 創造的 | 2 | 具体的 | 3 | 瞬間的 | 4 | 意図的 |
| 5 | 表層的 | 6 | 理性的 | 7 | 恒常的 | | |

問四

空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 主観や心象にかたよりがちである
- 2 隠喩や擬人法を抛り所としている
- 3 現実の奥にあるものを追求している
- 4 少しフィクション化してしまう
- 5 論理性より叙情性を重視してしまう

問五

傍線部 A これは本質があつたら不可能なことですとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の

選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 社殿は古くなっているので、ご神体を引越す作業には危険性がともなうということ
- 2 神様には本来本質などそなわっていないので、どこに遷しても差し支えないということ
- 3 ご神体にはその当然の権利として、自ら社殿を選ぶ自由が与えられているということ
- 4 神様はどんな場所にも住めるので、居場所を移す儀式が起源を損ねはしないということ
- 5 ご神体を移動できるのは、神がいるとされる場所に実際には何もないからだということ

問六 傍線部B 中空ゆえの融通のきかせ方とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 神社の中心は空虚なので、各々異なる神を祀ることが可能だということ
- 2 神の住まう社殿は、神の自由な選択と意志に委ねられているということ
- 3 神は自由自在の存在であり、その行動を妨げるものはないということ
- 4 禁域としての社殿は、神のどのような振る舞いも可能であるということ
- 5 神社は空からの器であり、神様にとっては自在な空間であるということ

問七 傍線部C 実体的な空虚とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 神は、人間の知覚や認識を許さない神聖な存在であるということ
- 2 何も存在しないという空しさや虚無が、そこに籠もっているはずの場所
- 3 実体のない架空の神が、ひとりぼつんと存在しているとされている空間
- 4 何もない空っぽな空間ではなく、入れ替え可能な何かが籠もっている場所
- 5 神は、時間や空間の外部にあって人間を超える実体であるということ

問八 傍線部 D 「つぎつぎになりゆくいきほひ(勢い)」の歴史的オプティミズムとあるが、筆者はそれをどのような考え方でとらえているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 表層を真似れば誰でもヤンキーになれる、蓄積など必要ないという無責任な考え方
- 2 「気合」と「アゲ」があれば、政治や理想がなくとも神の道は開けるという考え方
- 3 中身はなくても「気合」と「アゲ」があれば何とかなるという「勢い」重視の考え方
- 4 「気合」と「アゲ」といった勢いが、日本文化の表層を豊かにしてきたという考え方
- 5 日本の歴史は、「気合」と「アゲ」を重んじることで形成されてきたという悲観的な考え方

問九 本文の内容から見て、傍線部 E ヤンキー文化とつながらないものはどれか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 伊勢神宮の式年遷宮
- 2 東照宮
- 3 ウツホ
- 4 松阪牛の霜降り肉
- 5 弁証法

問十 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 「イセにおいては、実はなかったはずの起源が、隠されている。」からこそ誘惑的であり、すべての事実が隠されていることこそを議論の対象とすべきである
- 2 「イセはひとつの時点で捏造」されたものであるから、起源などないにもかかわらず「それがあつたかのごとくに騙る」ことは人を惑わせる点で疑問である
- 3 境界線が明確に存在しない中空というものは、日本神話に見られる同様の構造を議論の助けとすることでイメージが容易になる
- 4 中空構造は、日本人にとって昔から無意識のうちに共有されてきた構造であり、そこにはメリットもあればデメリットもある
- 5 中空構造の性質としてバランスが取りやすいことが挙げられ、それは「善悪、正邪の判断を相対化」し、「対立するものの共存を許す」とする説明が存在する
- 6 日本で弁証法が成立しないとされた背景には、「本質と本質の対立」があるにもかかわらず「正と反の変化」を許容してきたという経緯がある

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

一月二十九日、二月五日、三月一二日と三回にわたって子規^{注1}は『日本附録週報』に『叙事文』を執筆する。子規による写生文^{注2}についての発言として、評価の定まった論文である。

これまでの『叙事文』についての評論で繰り返し引用されてきたのは、三月一二日付の、最後のまともに入ったところだ。

以上述べし如く^{ごと}実際の有^{あり}のまゝを写すを仮に写実といふ。又写生ともいふ。写生は画家の語を借りたるなり。又は虚叙^{つまびらか}（前に概叙といへるに同じ）といふに對して実叙ともいふべきか。更に詳^{つまびらか}にいはず、虚叙は抽象的叙述といふべく、実叙は具象的叙述といひて可ならん。要するに虚叙（抽象的）は人の理性に訴ふる事多く、実叙（具象的）は殆んど^{ほと}全く人の感情に訴ふる者なり。

「実際の有のまゝを写す」という言い方は、ヨーロッパにおけるロマン主義に對抗して興った、写実主義としての「近代リアリズム」の **I** な認識を示しており、子規の主張をそうしたケイフ^{ケイフ}の中で位置づけることを可能にできた。また「写生」という概念が、「画家の語」であると定義されることで、「写生文」における視覚的描写が重視されてきた。

けれども、この『叙事文』による理論化に至るまでに、実際に子規が発表してきた散文の表現改革^イのキセキ^{キセキ}を辿^{たど}てみると、視覚に限定することのない、あらゆる身体的知覚感覚による世界把握の経験を、どのようにして言葉による表象に転換してきたか、ということが方法論として強く意識されていたことがわかる。

a 身体的な知覚感覚を媒介とした経験が、どのような言語表象と結びつくのかという、表現する側の過程と、どのような言語表象を実現すれば、読者の側の身体的知覚感覚に働きかけることが出来るのかという、読む過程の両方が子規の実践においては意識化されていたのである。

b、先の引用部分において、表現実践の方法として検討しておくべきなのは、「理性に訴」える「抽象的叙述」としての「虚叙」（概叙）ではなく、後半の、「感情に訴」える「具象的叙述」としての「実叙」についてである。

「虚叙」と「実叙」との違いについて子規は、一月二九日付と二月五日付の記事で詳細な具体例をあげながら明らかにしている。「抽象的」な論理としての「写真」「写生」ではなく、「具体的」な表現実践として「叙事文」をとらえ直すために、改めて具体例に即してみたい。

一月二九日の記事では「須磨の景趣」の描き方が例にとられている。「山水明媚風光絶佳……」といった紋切型の表現が「何の面白味もあらざるべし」と却下され、さらに「須磨は後の山を負ひ播磨灘に臨み僅かの空地に松林があつてそこに旅館や別荘が立つて居る。砂が白うて松が青いので実に清潔な感じがする……」という表現も、少し「精密に叙し」ただけで「須磨なる景色の活動は猶見るべからず」と批判される。

「景色」自身が「活動」するように書くべきだと主張する子規は、次のような文例を提示する。

iii 夕飯が終ると例の通りぶらりと宿を出た。燂くが如き日の影は後の山に隠れて夕栄のなごりを塩屋の空に留て居る。街道の砂も最早ほとぼりがさめて涼しい風が松の間から吹いて来る。狭い土地で別に珍しい処も無いから又敦盛の墓へでも行かうと思ふて左へ往た。敦盛の墓迄一町位しかないので直様行きついたが固より拜む気でも無い。只大きな五輪の塔に対してしばらく睨みくらして居る許りだ。前にある線香立の屋台見たやうな者を手で敲いて見たり撫で、見たりして居たがそれも興が尽きて再びもとの道を引きかへして「わくらはに問ふ人あらば」と口の内て吟じながらぶら／＼と帰つて来た。宿屋の門迄来た頃は日が全く暮れて灯が二つ三つ見えるやうになつた。

すぐわかることは、描かれていく世界に身体を内在させている表現の主体が、明確に位置づけられていることだ。この描写を行っている表現の主体は、この場所の宿に旅人として宿泊している。第一文の「夕飯」と「ぶらり」という言葉が、具体的

に世界の中に存在することを示し、身体的な知覚感覚によって世界をとらえていくことが可能になる。

引用部の末尾近く「わくらはに問ふ人あらば」という和歌の一節が記憶から浮かびあがつてくる。^{注4} 在原行平が須磨に引き籠った際に詠んだとされる、『古今和歌集』の「雑下」の有名な歌の最初の五・七である。読者はただちに「須磨の浦に藻塩垂れつつわぶとこたへよ」と続けることになる。この瞬間読者は、場面内の表現主体と共に、共有している文学的記憶を想起する。文学的記憶の蘇りに^{よみがえ}ついて、この「叙事文」を書く主体と読む主体とが同時に、「須磨」という名所としての地名を思い浮かべることになる。

この「叙事文」の具体例の後に記されている、「作者若し須磨に在らば読者も共に須磨に在る如く感じ」るためには、この文学的記憶の想起の「作者」と「読者」における **X** が不可欠なのだ。その効果は単なる知覚感覚的描写によってもたらされるわけではない。重要なのは、書く側と読む側の過去の文学的記憶の共有による、言葉の〈今、此所〉^{ここ}をめぐる

X と共存性の感覚なのである。

「わくらはに問ふ人あらば」から、「須磨の浦に藻塩垂れつつわぶとこたへよ」を想起した読者は、この歌の背後に在原行平の存在を認めないわけにはいかなくなる。すると、これまで何気なく読んできた、いくつかの言葉が、にわかに文学的記憶を呼び覚まし始め、やがて一つの像を結んでいくことになる。

「藻塩垂れつつ」の意味を了解すれば、海藻に海水をかけて塩分を多く含ませ、これを焼いてさらに水に溶かして、その上澄みを煮つめていくという、古くからの製塩法を読者は連想する。 **C** 海藻に海水をかけることは涙を流すことの比

喩なのだから、それは再び、ここで涙を流しながら失意の日々を送ったという在原行平の伝承を想起させる。「須磨」という地名はこの伝承と不可分だからだ。『源氏物語』の「須磨」の巻に、「行平の中納言の、藻塩たれつつわびける家ゐ近きわたりなりけり」とあるのも、^cそこ^cから来ている。

在原行平が文学的記憶と共に前景にせり出してくると、第二文で夕日に照らされていた「塩屋」の **II** 像と、「松の間から吹いて来」た「涼しい風」の **III** 冷覚的像がただちに文学的記憶へと接合されていくことになる。なぜなら田

樂能の『汐汲』をもとにした、観阿弥の原作を世阿弥が改作したと言われている、能の『松風』を想起させられるからだ。

須磨を訪れた旅僧が、潮汲車を引いて塩屋に戻ってきた二人の海女の少女に一夜の宿泊を頼み、暮れ方に海女の旧跡の松を叩いたことを語る。すると二人の少女は、自分たちは在原行平に愛されていた松風と村雨という海女の霊だと、涙ながらに旅僧に告白する。そして松風はレンボの思いに狂いながら、行平の形見である烏帽子狩衣をつけて舞う、という演目である。

「読者」の側が、「作者」の使用した言葉に内在する文学的記憶の想起によって、場面内の〈今、此所〉を共有する叙述法として「叙事文」を考えるのであれば、子規による見本の実践具体例が、次のように結ばれていることに、理論的にも納得がいくであろう。

何であらうと不審に堪へんので少し歩を進めてつくぐと見ると真白な人が海にはいつて居るのであつた。併し余り白い皮膚だと思ふてよく見ると、白い著物を著た二人の少女であつた。少女は乳房のあたり迄を波に沈めて、ふわ／＼と浮きながら手の先で水をかきまぜて居る。かきまぜられた水は小さい波を起してチラ／＼と月の光を受けて居る。如何にも余念なくそんな事をやつて居る様は丸で女神が水いたづらをして遊んで居るやうであつたので、我は惘然として絵の内に這入つて居る心持がした。

場面内に身を置く表現主体、あるいは子規の言う「作者」としての「我」は、『松風』の旅僧、あるいは彼を超えて、在原行平に成り代つている。月が出て海原の波立っているところに目を凝らしてみると、「二人の少女」が「白い著物を著」て、「手の先で水をかきまぜて居る」ことがわかる。「二人の少女」とくれば、新聞『日本』の「読者」であれば、誰もが『松風村雨』の二人を連想するに違いない。『松風』として定着した能の演目は、古くは『松風村雨』とも言ったのである。

「甲」は「乙」と同じ言葉を仲立ちにして、その言葉に内在する文学的記憶、すなわち同じ言葉が歌、物語、軍記、能といった様々な文学ジャンルに引用されて来た、現在に至るまでの言葉の文学的使われ方の全歴史過程を想像

することによって、きわめて多層的な（今、此所）を共有しながら、文学的記憶を共振させることが可能になる。

「作者若し須磨に在らば読者も共に須磨に在る如く感じ」に続けて、「作者若し眼前に美人を見居らば読者も亦眼前に美人を見居る如く感ずるは、此の如く事実を細叙したる文の長所」と子規が主張しているのは、このことなのである。「二人の少女」は遠くに見えているのであり、しかも夜の月明かりの中で、その「白い著物」が浮かびあがっているのだから、「眼前」でもなければ、ましてや「美人」であるかどうかは、この文章の描写の視覚性だけからは判断することは出来ない。

けれども『古今和歌集』の歌を記憶から蘇らせた瞬間から、「読者」は「作者」と共に、在原行平をめぐる伝承の、文学的記憶の総体を想い起こすことになる。すると、「二人の少女」を『松風村雨』に重ねてしまった以上、どう打ち消そうとしても、自分が想像しうる限りの「美人」でなければならなくなるのである。子規の文例の要には、「塩屋」であれ「松」であれ「風」であれ、「二人の少女」であれ、一つひとつの言葉それ自体に内在されている、地層のような文学的記憶の総体を、一瞬にして想起する想像力が位置づけられていた。そのことを、これまでのあまりに視覚中心の絵画論に傾きすぎた「写生文」論は見逃してしまっていたのではないだろうか。

（小森陽一『子規と漱石 友情が育んだ写実の近代』による）

注

1 子規——正岡子規（一八六七～一九〇二年）。日本の俳人、歌人。

2・6 『日本附録週報』／『日本』——『日本』は、一八八九～一九一四年に日本新聞社から発行されていた日刊新

聞。『日本附録週報』は、『日本』の附録として毎週発行されていた。

3 敦盛——平敦盛（一一六九～一一八四年）。平清盛の甥。

4 在原行平——平安時代の歌人（八一八～八九三年）。在原業平の兄。

5 ママ——「原文のまま」引用したことを示す記号。

問一 傍線部(ア) (ウ)の漢字と同じ漢字を含むものを次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ケイフ

- 1 外国へ単身フニンする
- 2 理論と事実がフゴウする
- 3 フメンダイの前に立つ
- 4 鉄道を新しくフセツする
- 5 キョウフの時間が過ぎる

(イ) キセキ

- 1 ジョウキを逸した行動
- 2 世界平和をキガンする
- 3 評価のキジュンを決める
- 4 順当なところにキケツした
- 5 ハンキをひるがえす

(ウ) レンボ

- 1 ダイキボな公共工事
- 2 ボジョウが湧き起こる
- 3 新人をボシユウする
- 4 ボゼンに花を手向ける
- 5 風景はボシヨクに包まれた

問二 空欄 **I**) **III** に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、ひとつの語は一回しか用いてはならない。

- 1 論理的
- 2 触覚的
- 3 虚叙的
- 4 散文的
- 5 視覚的
- 6 典型的

問三 空欄 **a**) **c** に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、ひとつの語は一回しか用いてはならない。

- 1 たとえば
- 2 ただし
- 3 もちろん
- 4 したがって
- 5 ところが
- 6 つまり

問四 空欄 **X** に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 確実性
- 2 同時性
- 3 客観性
- 4 文学性
- 5 歴史性

問五 傍線部 A 却下され、傍線部 B 批判されるとあるが、子規に「却下」「批判」された理由を筆者はどのように考えているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 ありふれていて退屈な感じしか与えないうえに、少しも精密でなく理論的な表現実践となっていないから
- 2 具体的な表現実践としての概叙になっっていないうえに、読者の文学的記憶になんら触れない表現だから
- 3 景色を精密に描くことにはかり注力していて、表現主体である書き手の存在が感じられないものだから
- 4 あまりにもありふれているうえに、感情に訴えすぎていて理性的把握が難しくつまらない描写だから
- 5 実際にその場で体験したような感じも与えないうえに、読む者に何の文学的な記憶も想起させないから

問六 傍線部 C そこ の指示する内容はどのようなことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 在原行平が昔須磨の塩屋で失意の日々を送ったということ
- 2 海藻に海水をかけることが涙を流すことの比喩であること
- 3 須磨という地名が、涙を流すということと同義であること
- 4 須磨という言葉により『源氏物語』が想起させられること
- 5 塩屋という名前が『源氏物語』の「須磨」に登場すること

問七 空欄 甲 ・ 乙 に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | 甲 | 乙 |
|---|------|-------|
| 1 | 子規 | 表現主体 |
| 2 | 読者 | 作者 |
| 3 | 表現主体 | 作者 |
| 4 | 子規 | 二人の少女 |
| 5 | 読者 | 二人の少女 |

問八 傍線部 D 言葉に内在する文学的記憶の想起によって、場面内の〈今、此所〉を共有する という説明に合致する具体例はどれか。最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 子供の頃母親が聞かせてくれたおとぎ話の一節を現在でも見聞きすると、亡くなった母を懐かしく思い出す
- 2 若い頃よく聴いた音楽のメロディーを耳にすると、今でもその頃の甘く切ない恋の思い出が鮮やかによりみができる
- 3 多くの日本人が知っている「カチカチ山」の昔話のせいで、狸たぬきと言えはするがしこい動物というイメージが強い
- 4 音の響きが似ているために「富士山」という地名から「不死」を思い浮かべる人が多く、不老不死伝説が生まれた
- 5 「古池」と聞くと有名な紀行文を残した俳人を思い出し、静かな池に蛙かえるが飛び込む水音が耳に響くおも想いがする

問九 傍線部 E 見逃してしまっていたとあるが、本文中の二重傍線部 i ~ v のうち、本文の筆者が見逃すべきではないと考
えている内容が表現された子規の文例として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 実際の有のまゝを写すを仮に写実といふ
- 2 須磨なる景色の活動は猶見るべからず
- 3 夕飯が終ると例の通りふらりと宿を出た
- 4 「わくらはに問ふ人あらば」と口の内で吟じながら
- 5 何であらうと不審に堪へるので少し歩を進めてつくぐと見ると

問十 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 言葉に内在する文学的記憶を喚起し多層的な〈今、此処〉を共有するためには、単に精密な描写に努めるだけでなく感情的な反応をよぶ実叙を心掛けねばならない
- 2 子規の文例によって在原行平の和歌や『源氏物語』が思い浮かべられ、文学的記憶の接合によって能の『松風』が想起させられる
- 3 子規が「虚叙」「概叙」として退けた文学的表現は文体が抽象的過ぎるため、読む人の理性を強く刺激し「実際の有のまゝ」を描写することが困難となってしまう
- 4 子規の主張する「写実」はヨーロッパ写実主義の認識に沿うもので、視覚にとどまらない身体の総合的知覚による世界把握とその表現を目指すものではなかった
- 5 〈今、此処〉の共有を可能とする文学的表現は、描かれる世界に身体を内在させる表現主体が読者の文学的記憶を呼び起こす言葉を吟じることが条件となる
- 6 場面内に身を置く表現は、作者の身体的知覚全体を媒介としてその場面を具体的に描写して読む者に伝え風景を現前させつつ、同時に文学的記憶の共有を導く

国語解答用紙

23日



問一		(ア)	①	●	③	④	⑤
問二		(あ)	①	②	③	●	⑤
問三		I	①	②	③	④	⑤
問四			①	②	③	●	⑤
問五		II	①	②	③	④	●
問六		III	①	●	③	④	⑤
問七			①	②	③	●	⑤
問八			①	②	③	④	⑤
問九			①	②	③	④	●
問十			①	●	③	④	⑤
問一		(ア)	①	②	③	④	⑤
問二		(い)	●	②	③	④	⑤
問三		I	①	②	③	④	⑤
問四			①	②	③	④	⑤
問五		II	①	②	③	④	⑤
問六		III	①	●	③	④	⑤
問七			①	②	③	④	⑤
問八			①	②	③	④	⑤
問九			①	②	③	④	●
問十			①	●	③	④	⑤

50点

問一		(ア)	①	②	③	④	⑤
問二		I	①	②	③	④	⑤
問三		a	①	②	③	④	⑤
問四			①	●	③	④	⑤
問五		b	①	②	③	④	⑤
問六		c	①	②	③	④	⑤
問七			①	②	③	④	⑤
問八			①	②	③	④	⑤
問九			①	②	③	④	⑤
問十			①	●	③	④	⑤
問一		(ア)	①	②	③	④	⑤
問二		I	①	②	③	④	⑤
問三		a	①	②	③	④	⑤
問四			①	②	③	④	⑤
問五		b	①	②	③	④	⑤
問六		c	①	②	③	④	⑤
問七			①	②	③	④	⑤
問八			①	②	③	④	⑤
問九			①	②	③	④	⑤
問十			①	●	③	④	⑤

50点